

和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori

NPO 法人百年の森づくりの会

2020
4.1

39号

巻頭言……………1 / 公開講座 荒川物語……………2-6

和名倉山森づくり報告……………7 / 年間スケジュール……………裏表紙

会創立二十一年の活動を振り返って

理事長 小林 公彦

百年の森づくりの会は、2000年6月28日に会を創立して、今年は20年目の節目の年を迎えます。今は亡き内藤勝久代表のもと、「水を育む山への恩返し」をコンセプトに、昭和39年に山火事で焼失した和名倉山の南東斜面にブナやミズナラなどの落葉広葉樹を百年かけて植栽する「百年の森づくり」計画をたて、荒川流域の環境保全に努めると共に、様々なグループとの連携を図り、荒川の浄化推進に寄与することを目的にスタートしました。

スタート時、189名の方々に賛同をいただき、会員ナンバーは971と多くの方々のご理解を得ながら20年間続けてまいりました。これもひとえに会員の皆様のご支援とご協力の賜物と改めて深く感謝申し上げます。

この間、植林地は5ヶ所で約7千本の苗木を植栽することができました。

和名倉山での植林活動は山が深いため、困難を極め、遅々として進められないのが実態ですが、昨年度までに44回のワークを実施しています。

このワークでは、中継地として仁田小屋再建という大事業を延べ人数600名のボランティアの協力のもと、2年かけて2003年11月に完成させました。この植林拠点づくりは、大きな達成感と会員の強い連帯の絆を創り出すものとなりました。

2002年4月には、大滝村（現秩父市）大陽寺の山の斜面に一般公募した100

名によりブナ、ヤマザクラ、クリなどの広葉樹の苗木300本を植栽しました。植林は初めてという方も多く、子供づれの家族や自然が大好きという高校生、年配のご夫婦など参加者のどの方も、快い汗を流して下さっていたことが印象に残っています。

2003年からは秩父西端地、山吹沢の県有林伐採地への植林活動を開始しました。山吹沢は2.2haと広大な場所です、毎年植林活動を続けました。その間、ローソン社員の家族、鳩ヶ谷市立八幡木中学校科学部の子供達、秩父のボーイスカウトや中学校テニス部の皆さん、生きがい大学の皆さんなど、世代を超えて参加していただき、共に未来を託した森づくりに汗を流す活動ができました。山吹沢の植林については、現在「秩父百年の森」に委託して継続的に植林活動を続けていただいています。

そして2007年10月から、長瀬宝登山での植林活動がスタートしました。長瀬宝登山ロープウェイ南西下、0.97haに420名の参加をいただき、ヤマザクラ・ツツジ・クリなどの広葉樹の苗木850本植栽しました。その後補植を重ね、現在約1600本に増えました。補植と共に毎年下草刈りを実施しており、真夏8月の下草刈りには、三井住友海上火災保険㈱の社員の皆さんがボランティアとして大勢参加下さっています。

2008年にはNPO法人として新たな

スタートを機に、百年の森づくり活動を提唱し、他の団体へ幅広い啓蒙活動を始めました。特に埼玉県内の高校のOB会などに森づくりを波及させ、「埼玉環境賞」を受章するという功績は大きな意義があったと思います。

しかしながら、内藤理事長は森づくり構想が浸透しつつあった2012年8月に、登山中の事故により急逝されました。内藤理事長は10年誌の機関紙の文中で、多くの方々との出会いが私達の活動の支えになっていると述べています。多くの方々の支えは、内藤理事長の人柄の証であったと改めて思い起こされます。

故内藤理事長の後、坂本和穂二代目理事長の時に、皆さんもご記憶のある東日本大震災が2011年3月起こりました。その復興支援ということで、2014年4月福島県田村市にて、放射能汚染の森林伐採地にブナ・ミズナラなどの広葉樹1350本植樹することが出来ました。

毎年田村市を訪れ、苗木の育成状況を観察しています。ブナなどは立派に育っており、復興支援に少しは役に立てたのではないかと思います。

現在会員数は180名であり、スタート時の会員数とほぼ同じです。これからも新たな活動を模索しつつ、地道な活動を続けてまいりますので、どうぞ皆様方のご支援ご協力をお願いいたします。

公開講座（令和元年十一月十日）

荒川物語——自然の荒川から 都市維持装置としての荒川へ



講師 認定NPO法人

水のフォーラム

理事長 藤原 悌子

荒川はここに至るまで何度も流路を変えました。最初は自然の力で、戦国時代・江戸時代には人為による瀬替えて、今は洪水放水路として開削された荒川放水路が正式の荒川です。社会の発展に伴い流路変更を余儀なくされた荒川の記憶を辿ります。

（自然による流路変遷）

今でこそ荒川と利根川は個別河川のように見えますが、江戸時代前半に行われた「利根川東遷」「荒川西遷」に分離されるまで、ずっと荒川は利根川の支流でした。荒川を語る上で利根川は欠かせませんので、両川併せて見ていきます。また、水は低きに就く、埼玉の地形は自然の水みちを教えてくれます。まず地形の理解から始めます。

埼玉は造山運動でできた「山地」と「丘陵」、河川の運搬・堆積・浸食作用でできた「洪積台地」と「沖積低地」、関東造盆地運動でできた「加須低地」、そして寄居を扇頂とする「古扇状地」、熊谷の大麻生を扇頂とする「新扇状地（熊谷扇状地）」で構成されています。

日本列島はプレートとの狭間にあって、その造山運動で山地部が姿を現すのが新生代第三紀後半（約2330

万年前）。造山運動は100万〜40万年前頃終わり、山河の基本形ができました。秩父山地を含む関東の山々も最後の仕上げに急速に隆起しましたが、なかでも秩父山地の隆起量は大きく、それまで秩父から飯能方面へ（横瀬の谷―正丸峠―高麗川の谷）流れていた荒川は堰き止められ、北流に転じて寄居に向かうようになりました。

以来、荒川・利根川・渡良瀬川・思川の4河川が山の土砂を運び出し、台地を形成しました。それが10万年前頃。160万〜1万年前は洪積世なので洪積台地です。これら河川は、今度は2万年前頃をピークに台地を深く開削します。思川と渡良瀬川が開削した谷が大宮台地東方の沖積低地の地下谷。利根川と荒川が開削した谷が大宮台地西方の荒川低地の地下谷です。洪積世は、氷河の時代。と言われ、寒冷化で海は三浦半島まで引いていました。大宮台地南端に立つと西と東は深い谷、グラウンドキヤニオン状態だったでしょう。

それが1万年前からの沖積世になると、地球は温暖化し、海が内陸深く入り込みます。日本では縄文時代なので縄文海進と呼ばれ、そのピークが7000年前頃。その後少しずつ

寒冷化して海退し、現在の東京湾まで下がります。その間も河川は流送土砂を運んで谷を埋めました。それが6000年前頃、沖積世にできたので沖積低地です。

一方荒川が平野に出る谷口では、10万年前頃、寄居を扇頂とする「荒川扇状地」を形成しました。その後沖積世になるとそこを開削し、北側に榑挽台地、南側に江南台地を残して、新たに大麻生（熊谷市）を扇頂とする荒川新扇状地（熊谷扇状地）を形成します。

そしてこの頃はまだ大宮台地と群馬県の館林台地はつながっていました。それが分離したのは、10万年前頃からとされる関東造盆地運動で加須を中心に地盤が沈降し、加須低地ができました。この加須低地を通じて利根川と荒川は大宮台地東方を流れるようになりました。加須低地に羽生や行田の古墳が埋まっているので古墳時代以降のことと見られています。

沖積低地は地形区分上最も低い土地。洪積台地との高低差は普通20〜30mあります。地盤の固さも違います。できて6000年程度なので地層はまだスポンジ状。地震で揺れれば地中の水が集まり吹き上げる液状

化現象を起こします。その沖積低地に荒川と利根川、思川を入れた渡良瀬川が流れるようになり、武蔵東部低地は自然堤防上の微高地を除き、河川と後背湿地の沼沢地が広がる一大河川氾濫原になりました。

こうして河川は自ら作った低地で乱流を繰り返しながら次第に流路が定まってきます。古代、701年の「大宝律令」で国郡里が制定され、その境界から流路を推測できます。

この時の武蔵国と下総国の境界から利根川を辿ると、大越（加須市）―栗橋（久喜市）は旧北川辺町を迂回し、栗橋―川口（加須市）を南西流、川口―小淵（春日部市）を南東流、小淵―長宮（旧岩槻市）を南西流。ここで701年以前の荒川と思われる星川を入れ、長宮―南百（なんど、越谷市）を南東流。南百―猿ヶ俣（葛飾区水元）をほぼ南流。猿ヶ俣で曲流し、ここで701年当時の荒川（旧綾瀬川、現圀川）を入れて南東流。新宿（にいじゅく、葛飾区）からは足立と葛飾の区界を西流。千住で入間川を入れて東京湾へつながります。この利根川流路の右岸側は武蔵国、左岸側は下総国でした。

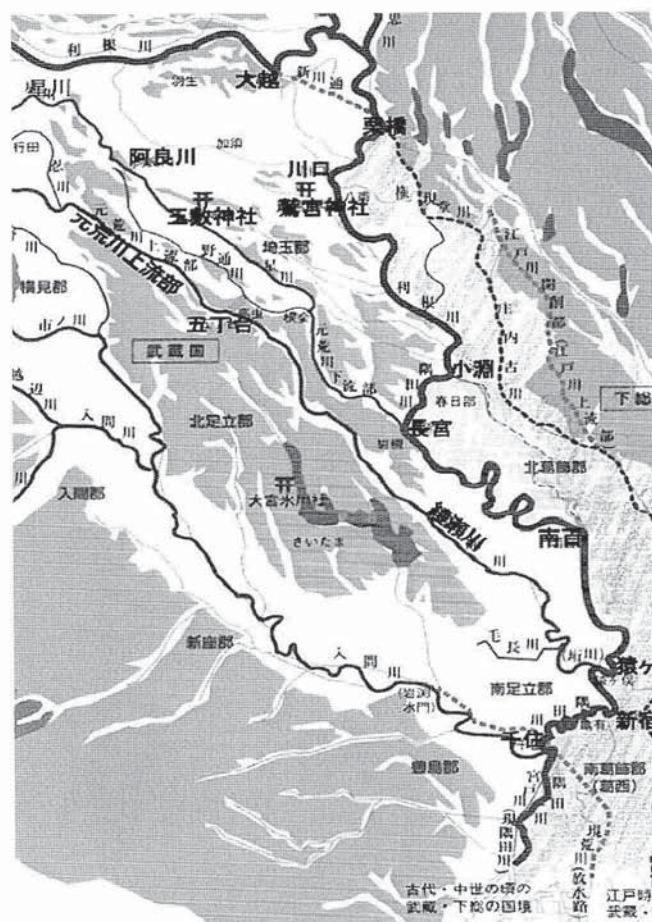
利根川はその後早いうちに、小淵から南百に直接南東流するようにな

り、小淵・長宮・南百の三角地帯はいつの頃かはっきりしませんが武蔵国に編入されます。

利根川末流の隅田川は、墨田区役所のある牛島と呼ばれた自然堤防の東側を流れていました。現在の隅田川は、古代・中世は牛島の西側を流れる利根川派川の宮戸川でした。

そして荒川は、足立郡と埼玉郡の郡界になりました。701年当時の荒川は、現元荒川上流部から五丁台（桶川市）を経て綾瀬川を南東流し、八潮市と足立区の県境を東流し（現堀川）、猿ヶ俣で利根川に合流していました。

これら古代の河川流路は神社分布でも推測できますが、紙面の都合上省きます。



大宝律令 国郡里制時の利根川と荒川流路

(人為による流路変遷)

①戦国時代

元荒川上流部（五丁台）―綾瀬川を流れていた荒川は、15世紀後半に蓮田台地が開削され、五丁台から東方の根金（蓮田市）に向かい星川につながれます。以来、荒川西遷までその筋が荒川流路になりました。

現在の元荒川です。

この時人為による流路変更を誰がしたかという点、太田道灌だろうと思えます。道灌は長宮に接する岩槻台地東端に岩附城を築きますが、その頃すでに利根川は小淵から南流筋に変わり、長宮を流れる川は星川の細流しかない。それで蓮田台地を開削し、荒川本流を五丁台から克蘭ク状に回して長宮に送り外濠の水に

した、と考えています。

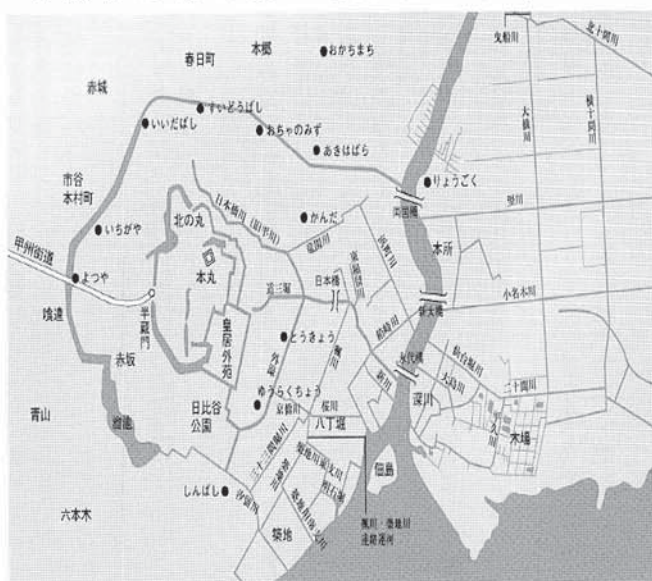
②江戸初期

秀吉に関東移封を命じられた家康は、天正18年（1590）八潮の吉日に江戸に入ります。関ヶ原に勝利するまで家康は一大名にすぎませんから、江戸の町づくりはまず徳川家が進めました。江戸はそれまで都市の実績がないのでゼロからのスタートでした。城の建築資材や生活物資を運ぶ運河「道三堀」と浦安から塩を運ぶ小名木川を開削し、江戸水道用に小石川大沼（現東京ドーム）から水を引き、入間川に千住大橋、多摩川に六郷橋を架けました。

慶長8年（1603）開府。家康は、当初進めた長安の都や平安京に習った「四神相応」の町づくりから、江戸城を中心に「の」の字に濠を巡らし、そこに放射状に五街道を組み合わせる江戸拡大策に切替えます。施工は諸大名による天下普請です。

神田山（今の御茶ノ水）を切崩して城と前島（洲）の間の日比谷入江を埋立て、海岸線も大規模に埋立て、前島東岸に櫛形の船着場を整備し、道三堀下流も整備して、そこに日本橋を架けました。利根川派川・宮戸川への隅田川瀬替えもこの頃でしょう。

慶長10年（1605）からは秀忠



江戸城と墨田川を結ぶ「の」の字の濠

が引き継ぎ、江戸城の天下普請を進めます。水路整備を本格化させるのは、元和元年（1615）大阪夏の陣が終わり、家康没後。小石川大沼から日本橋方面へ流れていた平川を飯田橋で締切り東流させ、途中神田山を開削して（御茶ノ水駅ホーム脇）、隅田川につながりました。この江戸城総構1期工事は元和6年（1620）に完成します。元和6年には、瀬替えした隅田川右岸側に日本中の大名を集めて「日本堤」も築かせます。

寛永9年（1632）三代将軍となつた家光は、江戸城総構二期工事で江戸城西北部を開削し、赤坂溜池―四谷―牛込と濠を巡らせ、一期工事の外濠につなぎ、寛永13年（1636）

江戸城を中心とする右渦巻の濠を完成させます。

家康、秀忠、家光三代で江戸の町はほぼ完成しましたが、明暦3年（1657）の大火で金の鯨輝く大天守もろとも江戸の町は灰燼に帰します。江戸はその後何度も火事に見舞われました。しかしその都度不死鳥のように蘇り、江戸中期の享保期には世界一の百万都市に成長します。それを支えたのが江戸の水路網。次にその江戸の水路網を支えた後背地埼玉の水ネットワークを紹介しましょう。

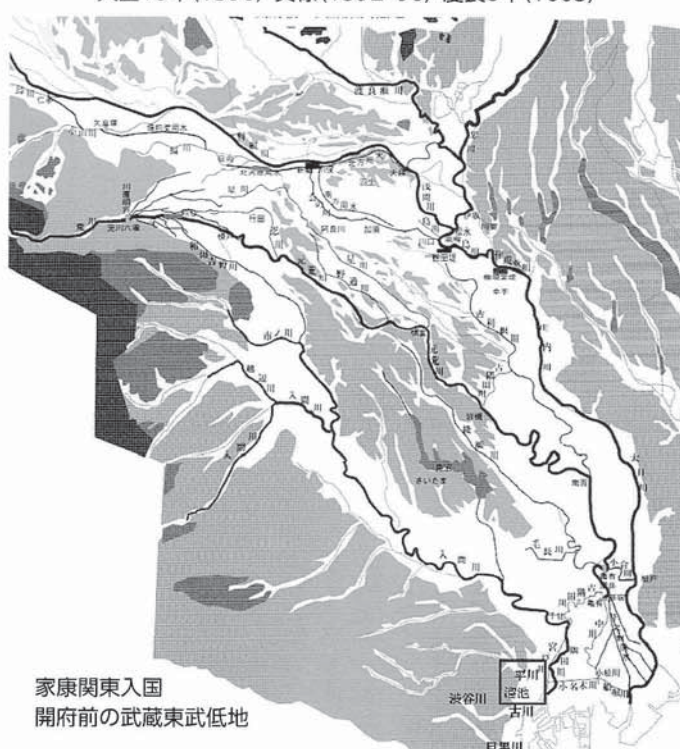
① 江戸の後背地の流路変遷

① 葛西用水のこと

家康は関東に入国するや、近習の伊奈忠次に「関八州を自分のものの如く大切にすること」「配下の者には依怙量肩しないこと」などを約束させ、関東一円の基盤整備を託しました。それが今に残る関東の主要河川や道路です。なかでも特筆すべき事業が、利根川を銚子へ向かわせた「利根川東遷」と荒川を入間川水系に瀬替えた「荒川西遷」事業です。

江戸間近の頃の利根川は、加須低地の川口（加須市）に至る筋がいくつかありました。川俣（羽生市）からの「会の川」筋、大越からの「浅間川」筋、北川辺町を迂回し途中で渡良瀬川と思川を入れてくる筋です。それらが川口に集まり、そこから東流筋は渡良瀬川流路（地元では権現堂川―庄内川―太日川）とし、南東流筋は古代以来の利根川です。

天正18年(1590)・文禄(1592-96)・慶長8年(1603)



家康関東入国
開府前の武蔵東武低地

伊奈忠次は、家康と江戸に入るや伊奈町小室に陣屋を設け、文禄元年（1592）から3年の間に利根川の会の川筋を新郷（羽生市）で締切り、川口に蛇田堤を築き、利根川を川口からの東流筋・渡良瀬川流路に瀬替えます。利根川東遷事業の始まりです。

そして同時に、川口で流頭を切られた利根川は「古利根川」となりますが、その最下流部の猿ヶ俣―新宿の間に「亀有溜井」を造成し、東葛西南部の小松川（現江戸川区）方面に「下之割用水」を引きました。

古利根川は流頭を切られて水がなはずです。にもかかわらずその下流に用水施設とは。水源を探しまし

た。熊谷扇状地の荒川はいく筋も流れがあり、主流は漸次南下し現流路に落ち着きました。細流は熊谷、行田の広大な田の水になりました。その落し（排水）が星川や忍川に出てきま

す。その水が今度は騎西領（加須市南部）の田の水になり、その落しがことごとく古利根川に入りま

す。これは自然の水みち、亀有溜井の水は荒川の水でした。

慶長19年（1614）には、騎西領の水田經由の古利根川の水と荒川本流（元荒川）の水を集める「瓦曾根溜井」を現越谷市庁舎脇に造成し、そこから八条領用水―八条領落堀―綾瀬川―猿ヶ俣とつないで亀有溜井に水を送りました。翌元和元年（1615）には、開府前から始めた熊谷扇状地細流の用水路整備も完了します。それが今に残る「荒川六堰」です。

慶長19年と元和元年は大阪の陣があった年、二代秀忠も諸大名も2代伊奈忠政も苦しいやりくりの中、入間

川水系を除く埼玉中の水を瓦曾根溜井に集め、亀有溜井に送りました。

その理由は、もちろん江戸市中の生活に必要な農産物を周囲海辺の村々で作ったからですが、米以上に求められたのが青菜です。米は舟運で運べますが、青菜はすぐ萎れて運べません。だからいち早く真水を小松川まで送り込んだ。この小松川の青菜は江戸中期に小松菜と命名され、今もこの一帯には大規模小松菜農家が残り、東京の子どもたちは「東京伝統野菜」の学習で見学に行きます。

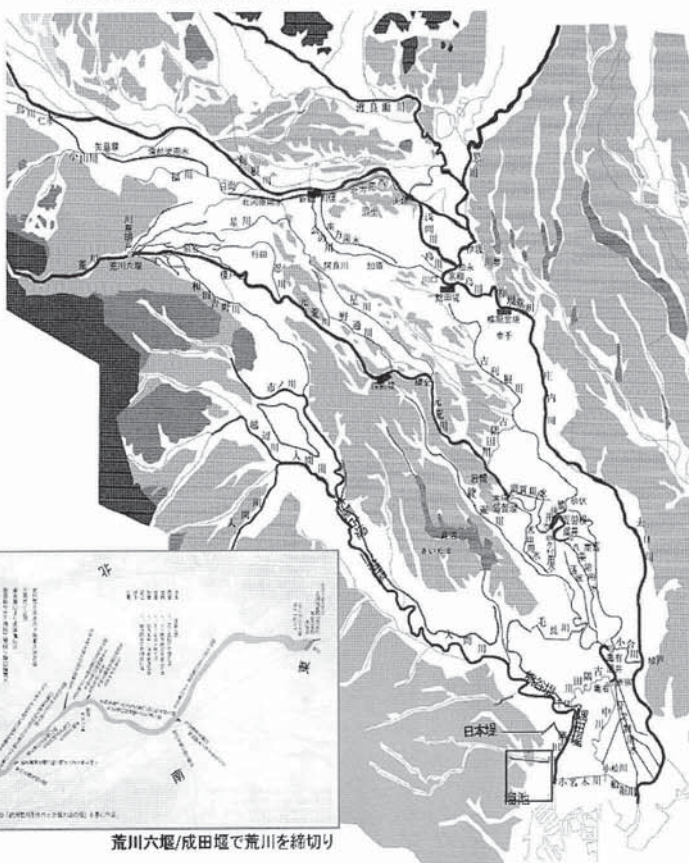
秀忠の時代、最後に現北川辺町を迂回していた利根川の大越―栗橋をショートカットします。「新川通」です。栗橋―関宿（野田市）も開削して常陸川筋に疎通させたかったのですが、洪積台地の猿島台地に阻まれました。

三代家光の時代の寛永6年（1629）、荒川を久下（熊谷市）で締め切り、和田吉野川―市野川―入間川―隅田川とつなぎました。「荒川西遷」です。しかしこの荒川西遷、利根川東遷のように洪水を遠ざけるのではなく、逆に洪水を江戸市中に入れることになりました。そこが、利根川東遷、荒川西遷は治水のため」と言い切れない点です。荒川西遷は舟運利用のためでしょう。そのためのリスクは8年前の元和6年（1620）の日本堤で対応しました。

日本堤は隅田川を挟んで対岸の隅田堤とV字形に配置されています。

慶長8年(1603)・元和(1615-24)

開府後の武蔵東武低地



隅田川下流はロー卜状になって洪水を制限し、寛永の頃には隅田川沿いに蔵が建ち並び、荷揚げのため無堤の隅田川川沿いを洪水から守りました。江戸時代、日本堤を超えた洪水は天明の洪水一回だけでした。逆に日本堤より上流は、熊谷まで幅広洪水敷（いわゆる河川敷）が続き、そこが荒川洪水の遊水地機能を果たしました。

家光の時代のもう一つ特筆すべき事業は、川越の伊佐沼から荒川右岸側を流れ、新倉（和光市）で荒川に合流していた内川を九十九曲がりに蛇行させ、流路沿いに河岸場を設け、舟運路を開いたことです。現新河岸川です。江戸湊に届く京・大阪

からの品々は「下り物」、周辺村々からの物産は「下らない物」と言われましたが、江戸の日常生活を支えました。川越舟運は客も乗せ、早船・急船、特急の飛切船もありましたが青菜の記録はありません。

承応3年（1654）、利根川東遷三期事業で栗橋―関宿（赤堀川）が疎通します。利根川は常陸川筋筋に導かれるようになり、関宿からは、寛永18年（1641）完成の江戸川（関宿―金杉間を開削）に3の割合、常陸川筋から銚子へは7の割合で分流させました。これが現在の利根川と江戸川です。

利根川洪水が常陸川筋に吐けるとなれば、平常時は利根川取水が可能です。早速、利根川の本川俣（羽生市）に幸手領用水の元坎（取水口）を設置しました。利根川の豊富な水が幸手領の田に入り、その余水や田の落しが古利根川に集まりました。瓦曾根溜井・亀有溜井の水も豊富になり、瓦曾根溜井には、下町の水道「本所上水」の取水口まで設置され、延宝年間（1673〜81）には東西葛西一帯に水が行渡るようになりました。

一世紀近くかけて整備した武蔵東部低地の用水系ですが、宝永元年（1704）の利根川大出水ですべて泥水に埋まります。念願かなって15年後、八代吉宗の時代の享保4年（1719）、8代伊奈忠達と石川伝兵衛が利根川の上川俣に元塚を設置し、幸手領用水路につなぎ、瓦曽根溜井までの埼玉葛西用水を完成さ

せます。享保15年（1730）には、見沼代用水路を開削した井沢弥惣兵衛が永が瓦曾根溜井から今の江東区・墨田区までの東京葛西用水路を完成させます。利根川から延長80kmの大用水路「葛西用水」を通じて、幸手から東西葛西まで10カ領が一つの「葛西用水組合」にまとまりました。

②見沼代用水のこと

「見沼代用水」についてはいろいろ語られていますので、特筆したいことのみにします。

見沼利用の歴史は、伊奈忠次次男

の忠治が寛永6年（1629）に見沼の南端に八丁堤築いて見沼溜井を造り、その水を淵江領（足立区）方面に送った「見沼用水」に始まります。

見沼用水の水源は見沼周囲からの湧水なので、早いうちから不足していました。承応3年（1654）に利根川が東遷し、利根川の水利用が可能になると、元禄14年（1701）に忍・岩槻・川越三藩の利害調整を済ませた「見沼用水改良計画」が出願されます。しかし用水路開削で農地が減る原市村や菅谷村（上尾市）の反対で頓挫しました。

それが動き出すのは八代吉宗の時代になってからです。吉宗は享保の改革で紀州から地方巧者・大畑才蔵に学んだ井沢弥惣兵衛為永を江戸に呼び、多くの事業を行わせました。その一つが、享保12年（1727）8月から半年工期で完成させた「見沼代用水」開削です。

葛西用水で説明したように、入間川水系を除く埼玉の水は古利根川に吸い寄せられるように北西から南東方向に流れています。水路沿いには道路も集落もある。利根川から水を引くにあたりそれらを横断すると、葛西用水利用の村々に迷惑がかかりますし、施工面でも膨大な時間とお金がかかります。そこで弥惣兵衛は、利根川の元込（行田市下中条）から見沼の八丁堤まで延長75kmの約1／4を星川兼用区間とし、その拡張だけでクリアしました。

星川との分岐地点（旧菖蒲町）に

(都市維持装置としての荒川)

岩淵（北区赤羽）から千住の北側を迂回して東京湾河口まで、21kmの荒川放水路を開削します。

大正7年の「荒川上流改修計画」では、本流は中流部の江戸以来の遊水地に頼り、流勢を緩和し流水を河心に集中させる横提を27カ所設置。支流の入間川は荒川合流点を4.5km下げる。新河岸川は荒川合流点を水門で締切り、内間木（朝霞市）から岩淵水門まで11kmを開削し、岩淵水門下流の荒川（隅田川）につなぐ。昭和39年には荒川放水路が正式に荒川となり、それまでの岩淵水門下流の荒川は隅田川になりました。

昭和22年、カスリーン台風が戦後の疲弊した日本を襲いました。それを機にダムによる洪水調節が導入され、荒川には今、一瀬・浦山・滝沢・合角の4ダムがあります。玉淀ダムは二瀬ダムで造った水を櫛挽台地や江南台地の農地に送るための貯水施設。いわゆる水資源開発のダムではありません。

荒川上流ダム群と武蔵水路（利根大堰・鴻巣市糠田）經由の奥利根ダム群が開発した都市用水は、秋ヶ瀬取水堰（志木市）で堰き止められ、そこから上流の太郎右衛門橋（桶川市・川島町）辺りまでがバックウォーター、ここに東京と埼玉の水道水が貯水されています。

荒川は、糠田（鴻巣市）の少し上流の六堰頭首工（荒川六堰）で江戸以来農業用水を取水していますから、糠田に流下する荒川は六堰の余

水と荒川上流ダム群が造る都市用水と河川維持用水の役割がありま
す。糠田地点に立つと、荒川の水は普段でも武蔵水路から来る水の半分、渇水時は5分の1程度、奥利根ダム群で造る都市用水がいかに多いか分かります。

奥利根ダム群について触れておきますと、利根川は八斗島（伊勢崎市）に河川基準地点があつて、ここに利根川本流筋、吾妻川筋、神流川筋からの水が集まり、下流に向かいます。この八斗島を野球のホームとすると、本流筋はライト、吾妻川筋はセンター、神流川筋がレフト。そのいづれにも洪水調節機能が必要なので、それぞれの筋に早いうちからダムが計画されました。唯一完成していなかったダムが吾妻川筋の八ツ場ダムです。いろいろありましたが、なんとか令和元年度末の完成予定に漕ぎつけ、この10月関東を襲った台風19号の大雨に間に合ったという事です。



荒川は今、笹目橋下流の都内では川幅500m～600mに狭められています。そこから上流は幅広で、糠田橋より一つ下流の御成橋の川幅は河口の4倍もあります。そこで荒川洪水を一時貯めるのですが、その機能をさらに高めるため平成16年度に荒川第一調節池が完成し、平成30年度に第二、第三調整池に着手しました。

荒川には江戸以来の遊水地機能が残っているのだから都市施設を入れる必要はないと思っていました。が、今回の台風19号で荒川は天端際まで水位が上がり、流入支川の水が吐けず、支川上流で氾濫しました。掘り下げた調整池は必要かもしれないと思った次第です。

(文責事務局)

2019年度下半期

和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当 高岡正彦

2019年度上半期

5月25・26日 第44回ワーク

(仁田小および周辺整備・破損ネット回収)

10月27日 ワーク中止・現地偵察

今年は、10月に発生した台風19号(令和東日本台風)による豪雨で多くの河川が決壊(13日)した。秩父市も多大なる被害を受け、三峯神社方面の道路が通行止めになった。直ちに、ワークは中止とし、落ち着いた2週間後の27日に、役員3名で現地調査に入った。



しかし、鮫沢橋手前の斜面が崩落していた。そこをまさにブルドーザーで整備の最中だったので、即、退散した。

12月15日 仁田小屋偵察

道路整備が一段落したので、仁田小屋の状況確認のために偵察に行った。時間短縮のため自転車を使った入山にした。



鮫沢橋の先の大洞ダムまでは整備されているが、それ以降は、まだ手付かず、荒沢橋までで、4ヶ所で自転車を担ぎ追加した。しかし、その他の箇所は、まったく問題無く、静かな山容であった。

仁田小屋周辺では、植林杉が数本倒れていた。根元から2mほどのところからへし折れた感じであった。荒ましいエネルギーの集中があったと思われる。

水場のホースが、大きな石の下敷きになっていた。大量の水が集中したと思われる。



仁田小屋自体は、目立った変化なしであった。風雨にさらされているテラス部分、トイレまでの渡しに使っている材木が、老朽化しているくらいであった。



次回も観察が主になると思っている。



2020年 活動スケジュール

活動への参加をご希望の方は、事前に事務局まで御連絡ください。

	総会・理事会	フィールド活動		エコサロン他
		和名倉	宝登山/太陽寺	
4月	■会報39号発行 ○4/20(月)常務理事会		◆宝登山 感謝の集い 日時:4/5(日) 集合:9:30/宝登山 ロープウェイ駅前広場	
5月	●5/18(月)理事会 場所:未定	◆第45回和名倉山ワーク 日時:5/23(土)~24(日) 集合:8:30/西武秩父駅	◆宝登山 下刈作業 日時:5/10(日) 集合:9:00/宝登山 ロープウェイ駅前広場	
6月	■第13回通常総会・記念講演会 日時:6/7(日)午後2時00分から 場所:埼玉会館 13:30 開場 14:00~14:40 第13回通常総会 14:40~15:10 活動報告 15:20~16:50 記念講演会 17:00~18:30 懇親会 ○6/21(日)常務理事会		◆宝登山 下草刈作業 日時:6/21(日) 集合:9:00/宝登山 ロープウェイ駅前広場	
7月			◆宝登山 下草刈作業 日時:7/19(日) 集合:9:00/宝登山 ロープウェイ駅前広場	
8月	○8/23(日)常務理事会		◆宝登山 下草刈作業 日時:8/23(日) 集合:9:00/宝登山 ロープウェイ駅前広場	
9月				◎福島県田村市植林状況調査 日時:9/6(日) 行程:未定
10月	■会報40号発行 ○10/19(月)常務理事会	◆第46回和名倉山ワーク 日時:10/24(土)~25(日) 集合:8:30/西武秩父駅		
11月	●11/16(月)理事会			◆公開講座 日時:11/8(日) 会場:未定
12月	○12/21(月)常務理事会			

和名倉百年の森 第39号 2020年4月1日発行

発行者: NPO法人百年の森づくりの会 小林公彦

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-1 コムナーレ9階

さいたま市市民活動サポートセンター内 メールボックスA-71

TEL/FAX: 0480-22-3131

http://www.100nen-forest.org e-mail: info@100nen-forest.org